

伝えたい 和紙のふるさと



本美濃紙をささえる

11月19日、岐阜県美濃市にある岐阜県森林研究所の研究員のお2人が、高村喜典さん（盛金在住）の楮畑を訪れました。2人は那須楮の生産地である本市で、楮の栽培状況や土壌の性質、水はけなどを調査し、美濃市でも高品質の楮を栽培する技術を開発したいと熱心に語っていました。

岐阜県の「本美濃紙」は、「和紙 日本の手漉和紙技術」としてユネスコ無形文化遺産に登録されています。登録されているのは、国の重要無形文化財に登録されている本美濃紙（美濃市）、細川紙（埼玉県）、石州半紙（島根県）の3件。その本美濃紙の材料である楮を生産しているのが本市と大子町で、その品質は高く評価されています。



▲美濃等に出荷される楮の荷姿

【那須楮を生産する高村喜典さん】

生産農家である高村さんは、楮を原木のまま市内の五介和紙に卸しています。楮は夏の成長期に何度も脇芽をかい、一本の真っすぐな木に育てます。手間がかかり、採算の面でも厳しい楮の生産ですが、高村さんはこう言います。

「こうして研究の役に立ち、自分の生産した楮の行き先も知ることができる。生産者としてとても励みになる。そして自分は、これからも和紙の良さを伝えていきたい。」



【森林研究所の茂木さんと渡邊さん】



「本美濃紙の原料は、現在100%常陸大宮市と大子町産のものです。美濃市でも高品質の楮を生産しようと、全国の生産地を歩いて調査研究をしています。」

常陸大宮市の楮は、繊維が細かく品質が高いと思います。また楮畑は水はけが良く水持ちが適度で、上手に株を世代交代させているようです。その辺りを細かく調べることで、地元産の楮を上手に育てる方法を探っていきたいと思います。

美濃市にも楮の栽培組合がありますが、高齢化が進んでいます。また、現在本美濃紙を漉けるのは6人で、次の世代に和紙の生産や技術を伝えていくことが重要になってきています。」



ここの畑の楮は、細いけれど高さがある。傾斜の差が水はけの違いに現れるのかな。

畑の土を実際に手に取って、湿り気や色などを確認。



楮は地表近くに根を張るため、土止めになります。また斜面を畑とすることで、水はけが良い土地を好む楮栽培に適しています。



高村さんの畑では、楮を基盤の目のように植えて、芽掻きなどの作業をしやすくしています。



<常陸大宮市の和紙>

古くは水戸藩の財政を支える産物として生産されていた西ノ内紙。高級紙として流通し、大名が使う御用紙や水戸光圀が編さんした「大日本史」にも使われました。しかし現在は、昔ながらの紙漉きを行っている家は二軒のみです。

<那須楮と呼ばれるわけ>

水戸領内の楮は、烏山など栃木県那須郡南部で集積され、鬼怒川を利用して江戸に運ばれたため、那須の地名が冠せられ、同様に当地産の紙も多くが「那須紙」の名で流通しました。そして「那須」の地名が付けられた茨城県産の楮は、今もこの名称で流通しています。